



三重県松阪市立 徳和小学校

ICT活用で「わかりやすい授業」を ～「生きる力」につなげる指導を目指して～

松阪市の小学校で一番の大規模校、徳和小学校では、40台のタブレットをフル稼働して、多様な場面で活用しています。今回は、eライブラリを利用した、4年と3年の授業の様子をご紹介します。

目標は「英語を楽しもう！」



▲ 聞き取りや発音が難しいところを繰り返し再生

外国語 活動

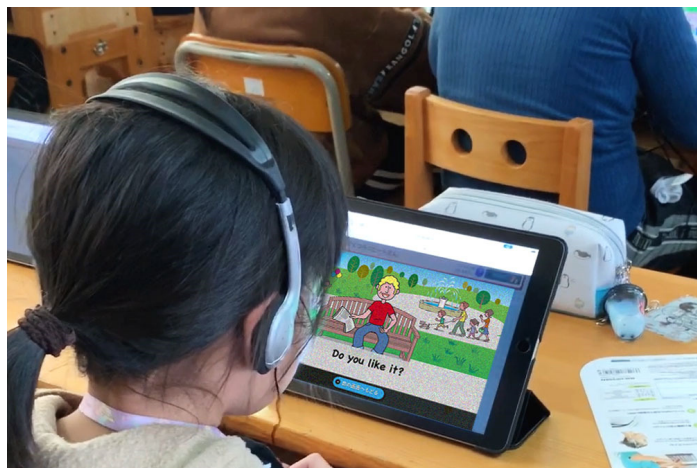
ゴー！ゴー！サンセットタウン ー公園でくつろぐピートさんー

4年の刀根 曜先生の授業は、「たくさん英語を発音して、英語を楽しもう！」を目標に始まりました。まずは全員で字幕を見ながら、映像のキャラクターの話を通して聞きます。

次に、もう一度再生し、ところどころ止めながら「何と言っているかな？」と確認します。

児童の挙手や発声の様子から、刀根先生は**児童が聞き取れていないところを聞き分け、繰り返し発音を練習します。**

個別の発音練習で自信アップ



▲ ヘッドホンを着けて集中し、繰り返し発音練習

全員で繰り返し練習したら、次は各自でタブレットを使い、映像に合わせて発音練習をします。**発音に自信がなかった児童も、ヘッドホンがあることで、周りを気にせず練習に集中できます。**

10分ほど個別練習をしたら、もう一度全員で通して発声します。すると個別練習の前に比べ、明らかに声が大きくなり、発音もハキハキとしています。ふりかえりでは**「難しいところを何度もやったらできた」という感想を書く児童もいました。**

ポイント

全体→個別→全体で発音練習を繰り返す

インタビュー 三口 英則 教頭先生にお話を伺いました

昔も今も、教員は「わかりやすい授業」を追求するために、身近にあるもので工夫してきました。今、身近にあるものは、ICTです。

例えば今回の外国語活動と理科では、発音練習やドリル問題に、**児童が目の前のタブレットと一対一で向き合う場面が生まれています。**一斉授業では行き届かないことがある個別対応が、ICTでならできるともあり、ICTによって「わかりやすさ」が増しているのです。

現状はICTを「うまく活用できている段階」です。今後は、「活用している」だけでなく、歩みを止めずに「生きる力」にどうつなげていくかを考えていかなければなりません。

■ 受け取ったらすぐ学習スタート



▲ 出席番号順にタブレットを受け取り、各自ログイン

理科 単元：風やゴムで動かそう

3年の武田 直也先生の授業では、理科のドリルに取り組みます。タブレットを受け取り、着席した児童は慣れた様子で各々操作を始めます。

武田先生は単元のまとめによくドリルを利用するそう、**あらかじめ取り組む単元を指示しておく**と、**児童は各自でeライブラリにログイン**し、操作に迷うことなく学習を始められるそうです。

この日も、リトライ機能を使ったり、隣同士で教え合ったりしながら次々と問題に挑戦していきます。

■ 集中力を持続し一問でも多く



▲ O×判定が自分でできるので、集中力が持続

これまで、プリントなどでは答え合わせに時間がかかっていたそうですが、eライブラリのドリルであれば、O×判定が各自ですぐにできます。

間違えてしまっても、**リトライをすればすぐに「Oになった！」という喜びに変わるので、問題に挑戦する意欲が続きます。**

さらに「答え合わせのための待ち時間」がなくなったことで、**児童の集中力も続き、より多くの問題に取り組むことができます。**

ポイント

待ち時間をなくして一問でも多く取り組む

インタビュー 児童と一緒に利用し、活用イメージが広がる

eライブラリには多様な機能があり、時には児童が先に見つけて教えてくれ、私も**一緒になって見ているうちに「こんな授業ができそう」とイメージが広がる**こともあります。

今回の授業では、英語の発音練習を、タブレットとヘッドホンを使い「個別に行う」時間をしっかりとりました。**「何度も繰り返したら、言えるようになった」という達成感を、今度はコミュニケーションへの関心という次の展開につなげていきたい**と考えています。



情報担当
4年担任 刀根 曜 先生



3年担任 武田 直也 先生

「ここが苦手なんだな」をピンポイントに判断できる

算数と理科のまとめで、eライブラリのドリルをよく利用しています。また、**学習履歴をチェックし、児童の苦手箇所の把握に役立てています。**eライブラリは教材構成がスモールステップになっている分、学習履歴を見るとピンポイントに「ここが苦手なんだな」と一目でわかり、**これまで丸付けと集計・分析にかけていた時間が短縮されました。**

テストをする前に「復習が必要か」「必要ならクラス全体か、あるいは児童個別か」の判断にも役立ち、とても助かっています。

※ 本紙の情報は取材当時（2019年度）のものです。